

アダプティブスポーツに関する考察～普及と発展のために～

保健班：橋本 晃輔 土谷 亮介 園田 翼 小田 晃裕

要約

本研究の目的は、アダプティブスポーツの現状と学生らの間で普及しない理由を明らかにし、普及に向けての要因を考察することである。調査によって、学生らが主体的にアダプティブスポーツを普及させていくのは難しく、この状況を変えていくためには、障がい者スポーツは障がい者のみで行うものだという固定概念を取り払うことが必要であることがわかった。従って本研究では、障がい者と健常者がどちらも参画しやすい取り組みを普及させ、アダプティブスポーツ自体の認知度を上げることが重要であるということが結論付けられた。

Abstract

The purpose of this study is to clarify the current state of adaptive sports and the reasons why it is not popular among students, and to consider solutions for popularization. According to the survey, it is difficult for students to proactively promote adaptive sports, and in order to change this situation, it is necessary to remove the stereotype that sports for people with disabilities are performed only by people with disabilities. It turned out that there was. Therefore, in this study, it was concluded that it is important to disseminate efforts that both people with disabilities and healthy people can easily participate in and raise awareness of adaptive sports themselves.

1. 序論

全ての人、障がいのあるなしに関わらず、スポーツに参加することができる。現状では、障がい者のみで行うパラスポーツと、健常者と障がい者が共に行うアダプティブスポーツが存在している。アダプティブスポーツはパラスポーツに比べ、統計的に認知度が低い。そこで本研究では、アダプティブスポーツの現状と、普及しない理由をパラスポーツとの比較から考察した。

2. 研究手法

パラスポーツとアダプティブスポーツについて調べ、その2つの特徴を列挙、比較し、対象を学生に絞ってアダプティブスポーツの普及への解決策を考える。

- ① アダプティブスポーツとパラスポーツの起源やルールなどの違いや先行研究を調べ、認知度の差を示す。
- ② ①の研究からアダプティブスポーツの長所や短所を示し、アダプティブスポーツを普及させていく事のメリットを示す。

- ③ 研究から得たアダプティブスポーツについての知識を用いて、自らアダプティブスポーツを考案し、理解を深める。

3. 結果

①アダプティブスポーツの起源やルール

・1993年に横浜で開催された「Adapted Physical Activity」が発端で、「その人に合ったスポーツ」という意味。スポーツのルールや用具を実践者の障がいの種類や程度に合わせたスポーツ。障がいなどのある人がスポーツを楽しむためにはその人自身とその人を取り巻く環境を含めたシステム作りこそが大切である。大阪教育大学で行われたアンケート調査では認知度は2.7%だった。

・パラスポーツの起源やルール

第二次世界大戦後に戦争でケガをしてリハビリをする人たちのために行われたスポーツ。ルールが確立されており、障がい者のみで行うスポーツ。パラリンピックなどの大会も開催されている。大阪教育大学で行われたアンケート調査では認知度は89.7%だった。

②アダプティブスポーツの長所と短所、普及のメリット

長所…今あるスポーツのルールを選手に合わせて変えることが出来るので、健常者、障がい者、お年寄り、小さい子どもと共にスポーツを楽しむことができる。

短所…認知度が低いうえに、障がい者スポーツは障がい者のみで行うものだというイメージが定着しているので、普及が進みにくい。

普及のメリット

スポーツを通して、障がい者と交流を行うことで、障がい者に対する考え方、理解が深まる。

③自ら考案したスポーツ

モルック（棒をなげ、数字の書いたピンを倒して得点を稼ぐスポーツ）を、アダプティブスポーツとして、ルールを変えた。二人一組でペアを組み、棒を投げる人に目隠しをしてもらい、もう一人が倒したいピンの場所を伝え、投げさせるようにした。そうすることで元々は目の不自由な人が出来なかったスポーツがルールを変えることで共に行えるようになった。

4. 考察

アダプティブスポーツの長所を生かせば、どんなスポーツでも、体験者に合わせて、ルールを変えることで、共に楽しむことのできるスポーツに変えることができる。しかし、現状、学生らが主体的にアダプティブスポーツを普及させていくのは難しい。この状況を変えていくためには、障がい者スポーツは障がい者のみで行うものだという固定概念を取り払うことが普及への解決策である。アダプティブスポーツを授業に取り入れる大学やNPO法人も出てきており、その取り組みをどう発展させていくかが今後の課題である。

5. 結論

アダプティブスポーツを普及させるには障がい者と健常者がどちらも参画しやすい取り組みを普及させ、アダプティブスポーツ自体の認知度を上げることが第一である。大学やNPO法人の取り組みを発展させるには社会全体の協力や、障がい者スポーツに対する考え方、意識の変

化が必要である。

6. 参考文献

永浜明子(2012)「アダプティブスポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル

宮本彩(2018)スポーツ専攻する学生へのアダプティブスポーツ教育に向けた取り組み
日本モルック協会 HP